広島大学心理学研究　第８号　2008

大学生の自己愛傾向と自我同一性との関連について

松下姫歌・橋村裕治

The relations between inclinations toward narcissism and identity in university students

Himeka Matsushita and Yuji Hashimura

本研究では，青年期における自己愛傾向は自我同一性の感覚に寄与する健康な側面をもちうるという仮説のもと，大学生の自己愛傾向と自我同一性との関連を検討した。自己愛人格目録短縮版(NPI-S)の下位尺度の主成分分析によって抽出された「自己愛総合」と「注目－主張」の２成分の高低によって対象者を４群に分類し，多次元自我同一性尺度(MEIS)の総合得点および下位尺度得点を比較したところ，全体的な自己愛傾向の高い群は低い群よりも自我同一性達成感を強く持つという結果が示された。このことから，NPI-S によって捉えられる一般青年の自己愛傾向の高まりは，病理的な自己愛とは異なり自我同一性達成に寄与するものであると言える。また，自分の感覚を軸に自己を捉える群の方が，他者の視点を介して自己を捉えようとする群よりも，自分の理想や願望を明確に意識していることが示された。

キーワード：自己愛傾向，自我同一性，大学生

問題と目的

1.　自己愛の概念

自己愛の概念について，初めて体系的に記述したのは Freud,S.(1914)である。彼は，自己愛を「自我へのリビドー備給」と捉え，自他未分化な幼児期における自己愛から，心的に自他が分化し，自己から対象へとリビドーを向け替えていくことで，対象愛へと発達していくとしている。つまり，リビドー発達において自己愛は対象愛の前段階にあると捉えられおり，また，発達上で生じうる幼児的な一次的自己愛と，神経症などにおいて生じうる退行的・病理的な二次的自己愛とは区別して捉えている。

この Freud の自己愛概念について，Federn をはじめとする諸研究者が，そもそも人間が精神生活を営む上での源となりうるような自我へのリビドー備給，すなわち“健康な自己愛”を考える必要性を指摘している。こうした観点を理論化した Kohut(1971,1977,1984)の自己心理学においては，健康な自己愛と病理的な自己愛には連続性があり，自己愛は精神構造の発達に寄与するものと捉えら

れている。幼児期には「自己を誇大化したい」,「対象を理想化したい」という二つの自己愛的欲求が生じるが，これらの欲求は両親との関係の中で適切に満たされることによって健康な自己愛の一部となる。誇大化欲求は自尊心として，理想化欲求は自我理想として内在化され，自己の準拠枠や価値観などの基礎となる。自他未分化な対象関係における誇大化欲求や理想化欲求が，理想と現実のギャップに向き合いつつ統合していく試みが繰り返される中で，心的次元での自己と他者が分化し，誇大化していた自己や理想化されていた対象を等身大の自己や対象として見出し，誇大性や理想性を自らの等身大の健全な能力として見出していくことになる。そのような健全な自己愛が発達することで初めて外的対象からの相対的な自立が可能となる。Kohut は，このように，自己愛的欲求は生涯を通じて継続し，対象愛と並行して発達するとしている。

2. 自己愛の分類

Kohut は健康な自己愛と病理的な自己愛との間に連続性があるものと捉える観点の下に，後者を自己愛性人格障害としている。こうした見方は，自己愛が必ずしも何らかの病理をもたらすものではなく，精神構造において重要な役割を担い，健康な側面を有しているという点を視野に入れるものである。こうした観点は，自己愛の性質や側面を捉える観点へとつながり，Kernberg や Kohut による臨床知見に代表される臨床場面における観察等から，自己愛人格障害には大きく二つの現れ方があることが多くの研究者によって報告されており，自己愛には二つの面があることが示唆されている。研究者によって呼称は異なるが，ほぼ同じ内容であり，その代表として Gabbard(1994)の「無関心型」と「過敏型」があげられる。

「無関心型」は他者の反応に鈍感で傍若無人な特徴を示し，「過敏型」は他者の反応や評価に過敏で，抑制的，対人恐怖的な特徴を示すとされる。Gabbard(1994)は，“自己愛的な患者に関する多彩な記述は，対人的関わりにおける典型的なスタイルに基づいて想定される連続体の二つの極の間に位置するものとして概念づけられる”と述べ，両者は，各々が独立した特性というよりも二つの「極」として捉えられるべきであるとしている。

3. 青年期における自己愛と自我同一性

Erikson は青年期の発達課題は「自我同一性　対　自我同一性拡散」であるとしている。“自我同一性は，その主観的側面からみると，自我の様々な統合方法に対して自己斉一性と連続性が存在するという事実と，これらの統合方法が，他者に対して自分がもつ意味の斉一性と連続性を補償する働きをしているという事実の自覚である”(Erikson,1959)。つまり，自我同一性は，他者との関係の中で一貫性・時間的連続性を持った自己に対する自覚と自信の感覚を示す概念と言える。

これを対象関係の観点から見ると，青年期は第二の分離 - 個体化の時期である(Blos，1962)と言える。父母からの心的エネルギーが撤収され，自分自身でそれを補おうとするため，青年期には自己愛が高まり，自己中心性や自己の過大評価など，自己愛的な人格特徴が表れやすい(Blos，1962)。しかし，現代青年については，母子密着の強まり(町沢，1998)や人間関係の希薄さ(福島，1992)等が特徴としてあげられることが多く，自己愛性人格障害に共通する枠組で理解しやすい人が増えている(塩尻，1992)と指摘されている。このような背景のもと，近年では自己愛性人格障害の臨床研究だけでなく，一般青年に見られる自己愛的な人格特性を自己愛傾向として捉え，青年心理の様々な

側面との関連を検討する研究が増えている。

小塩(2002)は，自己愛性人格障害の臨床研究の中で導き出された「過敏型」と「無関心型」が，一般青年の自己愛傾向にも当てはまるかを検討した。自己愛人格目録短縮版(NPI-S;小塩,1999)の下位尺度から抽出した2成分「自己愛総合」と「注目賞賛－主張」の高低により，自己愛傾向を，ⅰ)自己愛総合高・注目賞賛高，ⅱ)自己愛総合高・主張高，ⅲ)自己愛総合低・注目賞賛高，ⅳ)自己愛総合低・主張高の4群に分類している。さらに対人恐怖尺度や敵意的攻撃インベントリー等との関連から，4群それぞれについて，ⅰ)「過敏型」に相当する群，ⅱ)「無関心型」に相当する群，ⅲ)抑制的・対人恐怖的な群，ⅳ)他者や社会との関係に意識が向かわない群としている。

しかし，小塩(2002)では，ⅰ)自己愛総合が高く，注目賞賛欲求が高い群が「過敏型」に，ⅱ)自己愛総合が高く，主張欲求が高い群が「無関心型」に相当するとされているが，Gabbard(1994)が掲げている自己愛性人格障害者における「過敏型」・「無関心型」の特徴に照らすとあてはまらない点もあり，むしろ，自己愛総合は低いが注目賞賛欲求あるいは主張欲求といった自己愛が高いⅲ・ⅳの方にも，それぞれ「過敏型」・「無関心型」に当てはまる点が含まれているように思われる。そのため，小塩(2002)における「自己愛総合」「注目賞賛欲求」「主張欲求」という3つの自己愛の性質とそれらが複合することで生み出される自己愛の性質を検討する必要がある。

また，小塩(2002)では，自己愛の高い群(ⅰ・ⅱ)は低い群(ⅲ・ⅳ)に比べて適応的であるという結果も示されている。この点に関し，健康的な自己愛は，対象関係の中での相互一致の感覚，その普遍性と連続性の体験を通して同一性になる(藤原，1981)と指摘されている。一般青年における自己愛傾向は，自己愛性人格障害におけるものよりも，自我同一性，すなわち，他者との関係の中で一貫性・時間的連続性を持った自己に対する自覚と自信の感覚の形成に寄与する面があると考えられる。従って，4群に見られる自己愛性の違いと自我同一性との関連を検討することで，どのような自己愛が自我同一性と関連しているか，また自我同一性のどのような次元と関連しているかを明らかにできれば，自己愛の健康な面を見い出す観点につながると考えられる。

そこで本研究においては，青年期を「自我同一性　対　自我同一性拡散」の時期として捉え，青年の持つ自己愛傾向と同一性獲得感との関係について検討することを目的とする。

NPIと自我同一性との関連を検討した研究に三船・氏原(1991)等があるが，自己愛傾向のタイプと自我同一性との関連を検討したものは少ない。本研究においては，小塩の作成した分類の指標(自己愛傾向の2成分モデル)に従って自己愛傾向により青年を分類し，“どのような性質の自己愛傾向が，自我同一性のどのような次元と関連するか”といった点について検討を行う。

以上を踏まえ，本研究では，大学生の自己愛傾向と自我同一性との関連を検討し，心理発達的な視点から，自己愛傾向によって分類した4群の特徴をより明確にすることを目的とする。

方法

分析対象者　大学生180名(男性113名，女性67名)を対象に，集団法による質問紙調査を行った。その内，回答に欠損の著しいものや年齢が青年期に該当しない対象者を除外し，173名(男性109名，

女性 64 名)を分析対象とした。平均年齢は 20.23 歳(*SD*=.96)であった。

調査時期　2008 年 11 月に実施した。

尺度

①自己愛人格目録短縮版(NPI-S)

「優越感・有能感」,「注目・賞賛欲求」,「自己主張性」の 3 因子，各 10 項目，計 30 項目から成る。回答は,「とてもよく当てはまる」,「当てはまる」,「どちらとも言えない」,「当てはまらない」,「全く当てはまらない」の 5 件法で測定した。

②多次元自我同一性尺度(MEIS)(谷，2001)

青年期(第Ⅴ期)の自我同一性を測定する妥当性・信頼性の高い尺度であり，また自我同一性を多次元から測定できる尺度であることから，MEIS を用いた。

「自己斉一性・連続性」,「対自的同一性」,「対他的同一性」,「心理社会的同一性」の 4 因子，各 5 項目，計 20 項目から構成される。回答は,「非常に当てはまる」,「かなり当てはまる」,「どちらかというと当てはまる」,「どちらとも言えない」,「どちらかというと当てはまらない」,「ほとんど当てはまらない」,「全く当てはまらない」の 7 件法で測定した。

結果と考察

尺度得点算出　NPI-S の各項目に対して 5〜1 点を与えた後，NPI-S 全体及び各下位尺度に対応する項目の平均得点を算出し，各尺度得点とした。MEIS についても同様に，各項目に対して 7〜1 点を与えた後，逆転項目の処理を行ってから，MEIS 全体及び各下位尺度の得点を算出した。

記述統計　NPI-S と MEIS の各尺度得点について記述統計量を算出した(Table 1)。天井効果，フロア効果は見られなかった。

Table 1. 各尺度得点の記述統計量

	平均値	中央値	標準偏差	最小値	最大値
NPI-S	2.94	2.93	0.51	1.5	5
優越感・有能感	2.7	2.7	0.67	1	5
注目・賞賛欲求	3.02	3.1	0.69	1.1	5
自己主張性	3.09	3.1	0.64	1.6	5
MEIS	4.2	4.1	0.91	1.9	7
自己斉一性・連続性	4.67	4.6	1.25	2	7
対自的同一性	4.17	4.2	1.19	1.2	7
対他的同一性	3.74	3.8	1.12	1.2	7
心理社会的同一性	4.21	4.2	1.13	1.2	7

正規性の確認　正規性プロットにより，各尺度得点の分布について正規性を確認した。次に，*Kolmogorov-Smirnov* 検定を行った。検定結果を Table 2 に示す。

Table 2. 各尺度の正規性検定(K-S 検定)の結果(N=173)

	Kolmogorov-Smirnov の *Z*	有意確率
NPI-S	0.88	0.43
優越感・有能感	0.94	0.34
注目・賞賛欲求	1.05	0.22
自己主張性	0.82	0.51
MEIS	0.74	0.65
自己斉一性・連続性	0.95	0.32
対自的同一性	1.12	0.16
対他的同一性	1.1	0.18
心理社会的同一性	0.92	0.37

Kolmogorov-Smirnov の *Z* は，観測された累積分布関数と理論的な累積分布関数(ここでは正規分布)との間の最大差(絶対値)から計算されるものである。この適合度検定は，観測値が指定した分布から取られていると言えるかどうかを検定する。いずれの尺度についても，正規分布と各尺度の分布との差から算出された *Z* 値が有意でないことから，各尺度について正規性があると言える。

信頼性分析　NPI-S，MEIS ともに先行研究において因子構造が繰り返し確認されているため，今回は因子分析は行わなかったが，NPI-S，MEIS それぞれにおける各下位尺度の信頼性を確認するために，下位尺度に該当する項目の合計得点から *Cronbach* の α 係数を算出した(Table 3)。NPI-S，MEIS ともに，全ての下位尺度で α>.80 と十分な内的整合性が確認された。

Table 3. NPI-S，MEIS における各下位尺度の信頼性分析結果
(*Cronbach* の α 係数による)

	Cronbach の α
〈NPI-S〉	
優越感・有能感	.892
注目・賞賛欲求	.874
自己主張性	.825
〈MEIS〉	
自己斉一性	.848
対自的同一性	.835
対他的同一性	.847
心理社会的同一性	.839

NPI-S 下位尺度の主成分分析と群の設定(自己愛類型導出)　小塩(2002)に従って，NPI-S の下位尺度を縮約するために，相関係数を用いて主成分分析を行った(Table 4)。累積寄与率が 80%を超えたこ

とから，小塩(2002)と同様の 2 成分を採用した。

Table 4. NPI-S 下位尺度についての主成分分析結果

	相関係数		重み				
	優越感 有能感	注目 賞賛欲求	Ⅰ	Ⅱ	平均	*SD*	α
優越感・有能感	—		0.82	-0.08	2.7	0.67	0.89
注目・賞賛欲求	.459**	—	0.77	-0.52	3.02	0.69	0.87
自己主張性	.419**	.323**	0.74	0.63	3.09	0.64	0.83
累積寄与率(%)			60.13	82.78			

**$p<.01$

第 1 主成分は「優越感・有能感」に対して.82,「注目・賞賛欲求」に対して.77,「自己主張性」に対して.74 と，全下位尺度に対して.70 以上の大きな重みを示した。このことから，第 1 主成分は自己愛傾向の総合指標としての意味合いを持つと考えられる(以下,『自己愛総合』)。

第 2 主成分は「注目・賞賛欲求」に対して－.52,「自己主張性」に対して.63 と，中程度の重みを反対方向に示した。このことから，第 2 主成分は「注目・賞賛欲求」と「自己主張性」のどちらが優位であるかを意味すると考えられる(以下,『注目 - 主張』)。

ここで見出された第 1・第 2 主成分の主成分得点を対象者ごとに算出し，中央値を基準に各主成分得点の高低によって対象者を 4 群(ⅰ.高自己愛・注目優位群，ⅱ.高自己愛・主張優位群，ⅲ.低自己愛・注目優位群，ⅳ.低自己愛・主張優位群)に分類した(Figure 1)。

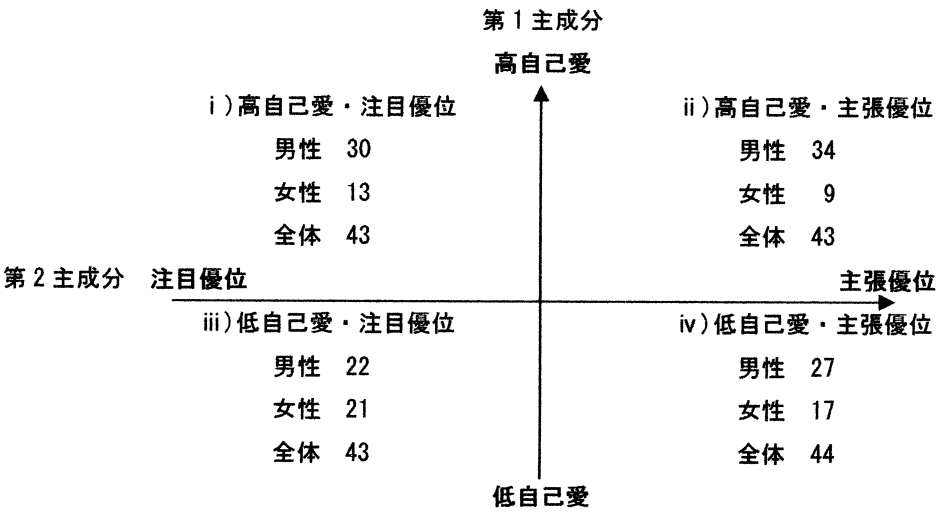

Figure 1. 主成分分析の結果から導かれる自己愛傾向の 4 分類

4群におけるMEIS尺度得点平均の比較　各群の特徴を明らかにするために，MEIS全体及び4つの下位尺度の得点平均を従属変数として，性別（2)×『自己愛総合』(2)×『注目 - 主張』(2)の3要因分散分析を行った。その結果，性別を含む効果が見られなかったことから，男女込みで2要因分散分析を行った。自己愛傾向4群におけるMEISの総合得点および下位尺度得点の平均値及び標準偏差と分散分析結果をTable 5に示す。

Table 5. 自己愛傾向4群におけるMEISの総合得点および下位尺度得点についての分散分析結果

Ⅰ自己愛総合	高群				低群				分散分析結果		
Ⅱ注目—主張	注目優位		主張優位		注目優位		主張優位		主効果		交互作用
	n=43		n=43		n=43		n=44		Ⅰ	Ⅱ	
	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*	平均	*SD*	*F*(1,169)	*F*(1,169)	*F*(1,169)
MEIS全体	4.24	0.91	4.61	1.00	3.82	0.79	4.11	0.79	11.54**	6.09*	0.08
自己斉一性・連続性	4.72	1.21	4.85	1.40	4.28	1.21	4.82	1.11	1.50	3.12†	1.15
対自的同一性	4.16	1.10	4.73	1.03	3.63	1.15	4.16	1.24	10.21**	10.07**	0.01
対他的同一性	3.74	1.11	4.07	1.23	3.58	1.02	3.57	1.08	3.86*	0.96	1.06
心理社会的同一性	4.34	1.13	4.77	1.15	3.81	0.95	3.91	1.06	18.09***	2.70†	1.01

† p<.10　*p<.05　**p<.01 ***p<.001

自己愛総合の主効果は，MEIS全体($F(1, 169)=11.54$, $p<.01$)，「対自的同一性」($F(1, 169)=10.21$, $p<.01$)，「対他的同一性」($F(1, 169)=3.86$, $p<.05$)，「心理社会的同一性」($F(1, 169)=18.09$, $p<.001$)に見られ，いずれも自己愛総合が高い方が低い方よりも，これらの自我同一性の感覚を強く抱いている。注目 - 主張の主効果は，MEIS全体($F(1, 169)=6.09$, $p<.05$)と「対自的同一性」($F(1, 169)=10.07$, $p<.01$)に見られ，主張優位の方が，注目優位よりも，自我同一性の全体的な感覚と自分自身についての同一性の感覚が強い。また，いずれの尺度についても交互作用は見られなかった。

以上の結果より，『自己愛総合』は自我同一性の感覚に関連し，全体的な自己愛傾向が高い人は低い人よりも，全体的な自我同一性の感覚が高く，特に，“自分がつかめている感覚”や“他者から見た自分と一致している感覚”，“社会の中で生きていける感覚”といった「対自的同一性」，「対他的同一性」，「心理社会的同一性」といった側面の同一性感覚を強く抱いていると言える。

また『注目 - 主張』すなわち，注目賞賛欲求が高いか，主張欲求が高いか，といった，自己愛傾向の現れ方については，注目優位の人は“他者から見られる”という他者の視線を介して自己愛を保つのに対し，主張優位の人は“自己の感覚を軸に行動する”ことによって自己愛を保つという違いがあると考えられる。したがって，主張優位の人は注目優位の人よりも対自的同一性の感覚を強

く抱いているという結果は，主張優位の“自己感覚を軸にする”自己愛のあり方が，注目優位の“他者の視線に基づいた”自己愛のあり方よりも，“自分をつかんでいる”「対自的同一性」の感覚と結びついていると言える。

「自己斉一性・連続性」については，『自己愛総合』と『注目 - 主張』のいずれの主効果も見られなかった。「自己斉一性・連続性」は自我同一性の中でも最も基本的で重要な側面であり，一般大学生においては自己愛傾向に関わらず達成感を有していたことが示された結果であると考える。

本研究の結果より導かれる自己愛傾向 4 群の特徴に関する仮説

小塩(2002)の結果と本研究の結果を踏まえ，自己愛傾向 4 群の特徴について，以下のように仮説を立てることが可能と考えられる。

ⅰ)高自己愛・注目優位群

高い自己肯定感を持ち，一貫した自己のイメージを持っている。他者や社会と適応的に結びついた自己の感覚を持つ。

ⅱ)高自己愛・主張優位群

安定した高い自己肯定感を持ち，自我同一性の感覚を強く持っている。明確に意識された自身の理想を，自己主張によって実現しようと試みる。個人志向的な側面もあるが，親密な対人関係により「対他的同一性」や「心理社会的同一性」の感覚を持つ。

ⅲ)低自己愛・注目優位群

自身の理想や願望が明確に意識されておらず，他者との関係や評価によって流動的に変化する自己を捉えている。対人恐怖的で，本当の自分を他者の前で表出できない。

ⅳ)低自己愛・主張優位群

本来の自分を意識し，自分にとっては自分がつかめている感覚は持っているが，他者や社会との関係の中でそれを適応的に意味づけられず，自信に欠ける。

総合考察と今後の課題

本研究では，大学生の自己愛傾向と自我同一性との関連を検討し，心理発達的な視点から，自己愛傾向によって分類した 4 群の特徴をより明確にすることを目的とした。

自己愛傾向と自我同一性との関連について，自己愛傾向の高い者は低い者よりも自我同一性の獲得感を強く持つという結果から，NPI-S で測定される一般青年の自己愛の高まりは自我同一性をつかむ感覚に寄与するものであることが分かった。また，自己を捉える際，自分に軸を置く者の方が他者を介する者よりも自分の理想や願望を明確に意識していることが分かった。

青年期はそれまでの自我理想が疑われ，新たな自我理想が構築される時期である。ここでの自己愛の高まりは，「自分とは何者か，何者になろうとしているのか，何者になり得るのか」(鑪，2002)という問いを生じさせるための力動的な過程，すなわち，自我同一性の獲得へと向かう過程として捉えることができる。

その際には，誇大自己を満たしたり，理想化したりする他者の存在が必要である。Kohut(1977)は，自己愛とはあくまでも具体的な対象との間で体験されるものであり，そのような対象のもつ機能はやがて内在化されていくが，そうだとしても，人間はその具体的な対象を一生必要としていると述べている。また，小塩(2004)によると，Adelson&Doehrman(1980)は，新たな自我理想が確立される時期には，“仲間との強い関係”が，青年の十分な自己愛のバランスと同時に，自己のまとまりを維持するのにも役立つと述べている。

以上より，青年期における自我同一性達成のためには，①自己愛的欲求を高めることで自我理想のイメージを明確に持ち，②親密な対象関係の中でそれを具体的につかんでいくことの2つが重要であると考える。そのことが，親から自立して自分自身のあり方を模索しながら，積極的に自分や他者・社会と関わっていくことつながると考えられる。

『注目 - 主張』は2つの対極的な性質を持つ軸であるが，注目＞主張となる主効果は見られなかったため，注目優位であること，つまり自己を捉える際に他者を介することが自我同一性の感覚のどの次元にどのように関連するかは本研究結果から直接的には見出せなかった。また，『注目 - 主張』の主効果が見られなかった「対他的同一性」と「心理社会的同一性」についても，自己の捉え方によって異なるプロセスで自我同一性の感覚を得ようとしているかもしれない。自己を捉える際に他者を介すか否かと，自我同一性の各次元との関連については，質的な検討を行い，より明確にしていく必要があると考える。

また，本研究で測定した自我同一性は主観的な感覚に基づくものであるため，自己愛の高さによる認知的なバイアスが影響している可能性も考えられる。特にii群のように，自己愛が高く自己を捉える際に他者を介さない者は，誇大自己と現実自己の統合への試みが行われにくいと思われる。従ってこの群の自我同一性達成感を抱いている者の中には，自我同一性危機を経験する代わりに，単に誇大自己によって擬似的に自我同一性達成感を得ている者も含まれるかもしれない。この点については，自我同一性拡散の危機に対する経験の有無と傾倒の状態に注目した Marcia(1966)の自我同一性地位の観点を取り入れた研究が必要であると考える。

引用文献・参考文献

Blos, P. (1962). On adolescence : A psychoanalytic interpretation. New York: Free Press.(野沢栄司(訳)(1971).青年期の精神医学　誠信書房)

Freud, S. (1914). Zur Einführung des Narzissmus. (懸田克躬・吉村博次訳 (1969). ナルシシズム論　フロイト著作集第５巻　人文書院)

藤原正博 (1981). 自我同一性と自尊感情の関係　遠藤辰雄(編)　アイデンティティの心理学　ナカ

ニシヤ出版　Pp.85-89.
福島　章 (1992).青年期の心――精神医学からみた若者――　講談社
Gabbard, G. O. (1994).*Psychodynamic Psychiatry in Clinical Practice : The DSM-IV Edition*, American Psychiatric Press, Inc.(舘　哲朗(監訳)(1997).精神力動的精神医学　その臨床実践〔DSM-IV版〕③臨床編：二軸障害　岩崎学術出版社)
秦　一士 (1990).敵意的攻撃インベントリーの作成　心理学研究, **61**, 227-234.
Jacobson, E (1964).*The self and the object world*, New York : International Universities Press.(伊藤　洸(訳)(1981).自己と対象世界　岩崎学術出版社)
Jacoby, M. (1985)*Individuation und Narzißmus : Psychologie des Selbst bei C. G Jung und H. Kohut*, Japanese translation rights arranged with Verlag J. Pfeiffer GmbH & Co through Japan UNI Agency, Inc, Tokyo. (田中康裕(監修), 高石浩一(訳)(1997).ユングとコフートの自己の心理学　個性化とナルシシズム　創元社)
Kohut, H. (1971).*The analysis of the self*.New York : International Universities Press.(水野信義・笠原　嘉(監訳) (1994).自己の分析　みすず書房)
Kohut, H. (1977).*The restoration of the self*.New York : International Universities Press.(本城秀次・笠原　嘉(監訳) (1995a).自己の修復　みすず書房)
Kohut, H. (1984).*How does analysis cure?* The University of Chicago Press.(本城秀次・笠原　嘉(監訳) (1995b).自己の治癒　みすず書房)
町沢静夫 (1998).現代人の心にひそむ「自己中心性」の病理　双葉社
Marcia, J. E. (1966).Development and validation of ego-identity status.*Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
三船直子・氏原　寛 (1991).青年期の自己愛人格について――実証的研究を中心にして――　大阪市立大学生活科学部紀要, **39**, 199-213.
村瀬孝雄 (1995).アイデンティティ論考――青年期における自己確立を中心に――　誠信書房
Ornstein, P. H. (1978).*The search for self-Selected writings of Heinz Kohut : 1950-1978 Volume 1*, International Universities Press, Inc.(伊藤　洸(監訳)(1987).コフート入門――自己の探求――　岩崎学術出版社)
小塩真司 (1999).高校生における自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連　性格心理学研究, **8**, 1-11.
小塩真司 (2002).自己愛傾向によって青年を分類する試み　教育心理学研究, **50**, 261-270.
小塩真司 (2004).自己愛の青年心理学　ナカニシヤ出版
塩尻瑠美 (1992).自己愛的性格　氏原　寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康弘・山本　格(編)心理臨床大事典　培風館　Pp.960-961.
谷　冬彦 (2001).青年期における同一性の感覚の構造―多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成―　教育心理学研究, **49**, 265-273.
鑪　幹八郎 (2002).アイデンティティとライフサイクル論　ナカニシヤ出版